

恒川陽一郎の大貫雪之助宛書簡紹介

細江光

此の度、大貫雪之助の令嬢・鈴子様の御好意により、大貫家に残されている雪之助宛の書簡の内、恒川陽一郎のもの十通すべてを公表しても良いという御許可を頂いたので、この場を借りて、翻刻・紹介したいと思う。

①明治38年3月22日付け封書

〔用筆・用紙など〕毛筆巻紙・封筒も毛筆

〔封筒表〕

神奈川県橋樹郡高津村

大貫雪の助様 直披

切手 三銭一枚

消印 ? 38・3・22 后6:50

消印 武蔵溝ノ口 ? 三月 ? 十三日

〔封筒裏〕

牛込区佐内阪町三十一番地

三月廿二日 恒川陽一郎

(本文)

おはがき拝見致し候

佐州行の苦役ゆるされ

給ひし由先づ大慶至極

に御座候

扱て、予定のごとく明日

午前八時半の西行列車にて

相伺ひ申すべくと存じ候ふが

御同行いかゞに候や。先程

は電報にて驚かし候へ共

こは御同行相成ればとの

考へに御座候ひしなり。

目的地は底倉わたりの

大関の湯なれども若し

君等との都合もあらば

転居致すべく候

費用は約八円に候へ共

御自分のかひもの料は

此上いくらでも御勝手

に御座候

同行者は目下飯田氏

と大野氏なれども

御存知のやうに共に

快活なる連中なれば

さぞ愉快なるべく候

御心あらば是非明日

御同行致したく候

勿々不_レ尽

若し御同行なくば(一字抹消)追て

向ふより申上ぐべく候へば

つゞいて御出で下されたく

候

恒川陽一郎

大貫君

なるべく明日

御同行下されたく候

(解説)

恒川は、この年三月に東京府立第一中学校を谷崎らと共に卒業した。大貫は一学年下であるが、この前年あたりから、谷崎・恒川と文学を介しての親友となっていた。

②明治40年6月18日付け葉書

〔用筆・用紙など〕毛筆

〔表〕

神奈川県橘樹郡高津村

大貫ゆきさま

京にしや

十八日午后葉より

切手 一錢五厘

消印 牛込 40・6・18 ? 6-7

消印 武蔵溝ノ口 四十年六月十九日 イ便

〔裏〕

過日米いろくお心配

相かけ、厚く御礼申上候

近詠数首

また、詩人側の不評に

畢るべき乎呵！

笑みたまふさあれ悲哀のひらめきに

秋を榮しみ我心泣く（あ、これは君に

見せましたネ）

雨の日も向日葵めぐる今別れ無窮に見

ずとも忘れたまふな

光子さんよろしく

（解説）

《大貫ゆきさま／京にしや／葉より》という書き方は、芸者か遊女の真似であろう。《京にし》は東京の西ということか。

後出『鎌倉日記』に恒川が《葉さん！》と呼ばれる例がある事から考えると、恒川は普段から「ようさん」と呼ばれていて、それに《葉》の字を宛てたのであろう。

二人は前年九月、谷崎より一年遅れて、一緒に一高に入学した。恒川は、金沢の四高に行つて、一年遅れたためである。

なお、大貫は明治三十九年十月、恒川はこの四月に新詩社同人となつていて、六月号の「明星」には、大月品川（大貫雪之助）の長詩「夜」「草」、恒川石村（陽一郎）の長詩「日ざかり」が掲載されている。

③明治40年8月7日付け繪葉書

〔用筆・用紙など〕毛筆

〔表上段〕

東京市赤坂区青山南町三、二十三角田様方

大貫雪之助様

鎌倉阪ノ下

七日昼恒川葉

切手 一錢五厘

消印 相模鎌倉 ? 八月七日 二便

消印 ?・8・7

〔表下段〕

長庵は烟のやうな

男也。僕が去月末から

少し不快で（月見草の

夜伽をした罪が原因さ）

臥てると、さんざ痒聴

さした揚句がスーと

烟のやうに……行先は

当人にきくべし。然し僕も

もう近い中に起る。そう

して二人とも東京へ帰る

から安心して給へ。十二三日

すぎには牛込に居る。ヤツ

て来たまへ。谷崎も来るとい

つてゐる。谷崎は此間函根

へ行つた。二晩どまりで帰つて

来て、会はないと泣き面

をして居る。 葉

雪さんへ

〔裏〕（注 「鎌倉大仏」の写真の上に）

臥てるとよく筆が廻

らないで癩にさわる。大磯は

中々居ると長庵が独りて

口惜しがつてゐる。鎌倉にも

一人居るつて病人

を尚悪くさせやう

として罪が深い。

此間三橋旅館で

某連中が大酒宴を張つて居

た中に一人似たシンガーが居るつ

て、僕はさんざ甘い目に会つた。

僕はそのシンガーを君に紹介する必要は

ないと思ふ位、長庵の趣味と僕の趣味の

畢（注 異の誤記か？）ふのを感じて妙な思が

した。

今月の雑誌でい、の

は（明星）啄木の

短歌、（中央公論）

芸妓論

及白鳥の

久さん（早稲

田文学）風葉の

生みの母、葉舟の

彼、（婦人世界）弦

斉の生活法、（文

芸倶楽部は

何だか一つも気に

くわぬから中途

でやめた。

早稲田文学の

脚本は、説物

としては皆面白

いと

思つた

（解説）

《東京市赤坂区青山南町三、二十三角田様方》は、大貫家の元の別邸。紹介の順序とは逆に、裏の方を先に書いたのかもしれない。恒川は、少し体調が悪いようだが、まだ後年の様にひどくはなっていないようである。なお、恒川は、この時の事を

『鎌倉日記』と題して、「明星」の九月号に寄稿している。また、「明星」八月号の「◎社友動静」欄には、《恒川石村、殿井万里は鎌倉に》（避暑中なり）と出ている。或いは《長庵》と《殿井万里》とは同一人物でもあろうか。

岡本かの子の「ある時代の青年作家」によれば、かの子と初対面の時、恒川陽一郎（作中では常村藤一郎）は、《先日迄、鎌倉のおせいちゃんの別荘へ行つてましたよ》と言ひ、《その頃萬朝報に出てゐた大塚楠緒子女史の小説の批判》をした。「萬朝報」に連載されていた小説は「露」で、その時期は、明治四十年の七月十九日から九月十三日までであるから、この絵葉書を書いた《鎌倉阪ノ下》が、かの子の同窓生《おせいちゃん》（注 作中での仮名）の別荘》で、帰京後間もなく大貫家を訪ね、かの子にも会つたと推定できる。「鎌倉日記」で《お貞ちゃん》と呼ばれている人物が、「ある時代の青年作家」の《おせいちゃん》に当たるらしい。

文中に《谷崎は此間函根へ行つた。二晩とまりで帰つて来て、会はないと泣き面をして居る。》とあるが、言うまでもなく、《函根》は穂積フクのことである。「死火山」によれば、谷崎は、四十年の四月に一度、箱根に遊び、「はこね路をゆふこえくればわきもこがくろかみあらふ湯のけぶりみゆ」といふ、実

朝の「箱根路をわが越え来れば伊豆の海や沖の小島に波のよる見ゆ」を少し変えただけの歌を作っている。しかし、この時はまだフクに恋を告白していなかった。告白したのは五月九日、十一日に会った際、フクは「養育の思ある伯母に売られる身で、結婚は不可能だから、男らしく自分の事は断念して、立身出世して欲しい」と言ったとされている。(会はない)とは、「フクが会おうとしなかった」の謂いであろう。現行「谷崎潤一郎全集」第二十五巻に、書簡二(年月未詳)として収められている(昨日此処の福住へ来た、どうなる事やらわからん、ちきに帰るから御返事を下さらぬやうたのむ/八日/潤一郎)という絵葉書は、この時のものようである。だとすれば、明治四十年七月八日が最も有力であろう。「鎌倉日記」に、(箱根へ行った某君から)〈絵葉書で、I have had passed the native place of my Dearest. / とあるには恐れ入った。〉と出て来るのも、谷崎の事であろう。

④明治41年1月26日付け葉書

[用筆・用紙など] 毛筆

[表]

本郷区駒込第一高等学校寄宿舎東寮四番

大貫雪之助様

青山

二十六日 恒川生

切手 一銭五厘

消印 青山 41・1・26 后1—2

消印 駒込 41・1・26 后4—5

[裏]

先達ではわざ／＼御見舞下され感鳴

いたし候。さて此度は新詩会へお招きを頂

き有難く存候ところ、いまだ病床を離るる

に至らず、熱はなけれど気分すぐれず候ふ

仕末、折角なれど失敬いたし候。又、新体詩

も一向に出来ず、例の「みだるるころ」はあれど

あれは、ほんの中学向きにて篠原氏の雑誌

へやりたるまで、兄等には見せられぬ駄作也。これも

御免蒙り候。谷崎が病気の由、どうりで今日は

函根の方くもり候。お気の毒に候。「火の酒は

谷崎に毒」云つて下され度く候。先は、

(解説)

〔新詩会〕は一高新詩会のこと。大貫は二月から谷崎らに代わって、文芸部委員となった。四十一年二月十日に刊行された「校友会雑誌」百七十四号には、「文苑」欄に大貫品川の「自然詩人」、「一高新詩会詠草」の一つとして石村（恒川陽一郎）の「ほろびぬかをり」がそれぞれ掲載されている。なお、〈兩根〉云々は、言うまでもなく穂積フクのことである。

⑤明治41年7月13日付け葉書

〔用筆・用紙など〕鉛筆書き

〔表〕

県下橋樹郡高津村

大貫雪之助様

鎌倉阪の下二二九

葉

切手 一銭五厘

消印 鎌倉 四十一年七月十三日 口便

消印 武蔵溝ノ口 四十一年七月十五日 八便

〔裏〕

御見舞に接して、有難い。此休は床

上生活。起き上ることも出来まい。人と談

話するのも面倒。第一熱があるから本を読む気もしない。十分とつづけてよめないから可愛相だ。一人で静に眠ってるのが楽しい。実は筆を取ってるのも大儀だ。世の中は焚つてるね、君。僕は悟つた。直つたら、嫌な奴を、翻弄してやる。

〔解説〕

文面から、恒川は、胸の病で転地療養を試みていたと推定される。

⑥明治42年5月29日付け封書

〔用筆・用紙など〕封筒は毛筆、本文は黒インクで、松屋製十二ノ廿五（三百字詰）原稿用紙7枚

〔封筒表〕

神奈川県橋樹郡高津村字二子

大貫雪之助様 御返事

切手 欠

消印 武蔵溝ノ口 四十二年五月 三十日 口便

〔封筒裏〕

青山北町七ノ二

恒川陽一郎

二十九日夜

(本文) (注) 省略した改行は / で示す。

拜復、

けふ、学校であつたとき、きのふのことを聴かうと思つて

居 / たけれど、山脇さんの一件や何かで、その折を得なかつた。

お / 手紙は、繰り返し繰り返し読んだ。さて、

大貫君台下、

恋は痛いものである。泣くべきときは泣くことが出来な / いで、泣くべからざるときは、泣くまいと思つても泣かされ / て畢ふ。残酷だ、然り、痛いものである。君が、きのふ、遇ひに行くと云つたとき、僕は止めやうと思つた。ね、君、僕は正直に云ふ、 / この夜、嫁くといふ若い女、しかも曾ては相愛の fiancee であつ / たではないか、その人のもとに、君が遇にゆくといふ。怒つて / はいけない、これ、或る意味に於て、新しい主人に対する、礼を (以上一枚目) 欠いた行だと云はれるかも知れぬ。

それなのに、僕は何故とめなかつた歟。それは、僕が恋に負 / かされて畢つたのだ。君が、そは、そはとして、一寸も落ち

つか / ない、心の不安とでも云はうか、その有様に、たへられなく成 / つたのだ。僕は淋しく成つた。君は行つた。あの時の後姿は今 / も忘れられない。

君よ、僕は感謝する、何事も云ふまい。君は、僕は、敏子君は、は / た我が恋しき人は、勝利を得た。然り勝つた。けれど、その勝つ / た時は、吾々は悲劇の絶壁をすべつて居た。

自白す、僕は、今迄、君の一部を嫌つて居た。「松南や、伊藤や、小 / 林やその他、かの一派の下劣な、浅薄な誠実」を憎める如く、君 / の恋を薄つべらなものと嫌つて居た。正直に云はしめよ、僕 (以上二枚目)

は泣いて居る。君が、敏子君を昨日に恋ひ、今日は曾野君の / 姉さんと思つてるといふ、二元の Love を僕は、口惜しいまでに、 / 不真面目と憎んで居た。君が、僕を、「親しめぬ、どうしても二 / 人の間に隔てがある。」と例の波沢一件の時に大勢の前で云 / つた時も、僕は腹の中で笑つて居たが、それといふのも、この / 憎みの情が、隔てを作るんぢやないかと思つたからだ。谷崎 / にきいても分らう、僕は、此点で、大に君を攻撃して居た。

けふの手紙はがらりと、この憎みを解いた。君は善人だ。僕 / は、あやまる。ただ、君はあまりに善なるがゆゑに、乱暴

なまで／＼に露骨だ。その露骨すぎる言葉が、今のかぎりすぎた世間の／＼内に育つた僕の頭の間違つて響いて居たのだといふこと／＼を、みとめて、呉れたまへ。さうして改めて友達にならう。少な（以上3枚目）

くとも、僕はもう君を忘れられなく成つた。

文才を慕つた今迄の心をすてて、けふからは雪之助なる／＼君と泣かう。少しばかりの才気を認めて呉れた君の好意が、／＼も僕の胸底に、わだかまつてる熱誠を知つて呉れたら、ど／＼んなに僕は嬉しからう。僕は嫌ひな奴は、どこまでも嫌だ／＼が、又自然、冷淡なこともするが、「誠」に感激して死ぬる勇氣位／＼は持つて生れて来た。谷崎の云ふ思想ほど迄に墮落はし／＼居ないつもりだ。此点に於ては、親友だが、彼とは行き方を／＼異にして居る。

大貫君足下、

恋は到底悲劇である。僕は、いよいよ地獄に沈んでゆくのだ。月日が、僕を遂に大学に入れやうとして居る。しかも何故

（以上4枚目）

それと全時にLoveをも解決して呉れないのか。此間、君たち二人が宿つた日、の午后、僕は遇ひに行つた。これ喜ぶべき事実／＼乎、哀しむべき事実乎。泣くべきか、はた死ぬべき乎。

僕は変な／＼氣持に成つた。十七、十八、十九、二十ああ春と秋とは、いく度か／＼めぐり去つた。渠の女は凄いい迄に青白く成つて畢つた。悲劇／＼が、危い壁の上へ起つたとき、それは去年であつた。僕は、渠れ／＼は、——実は自殺を企てた。

知るまい、僕は書置まで作つた。それから、大好きな姉の顔／＼を見おさめに行つた。又Loveの話をして、二人でさんざないた。／＼その晩は、とうとう寝ずにあかした。利口な姉は、いつか、二人／＼の死を見破つた。さうして、蛇度、きめてやるからと云ふて、ど／＼うしても、僕を放して呉れない。かくて、又春が去つた。（以上5枚目）

ああ、僕の運命は、どう開展してゆく乎。Loveのよろこびに／＼始まつた高等学校の生活が、又Loveの痛みに終つて畢つた。

僕は僕の恋を知らせるのを非常にいやがった。そのため／＼に随分、自分ながら哀しい迄に、呑気な、馬鹿々々しい女の噂／＼などにも口を出して来た。知る人は知らう。

大貫君台下、

もう止めやう。いつか夜、話さう。僕は夜がすきだ。狂間は嫌だ。行きたいが、親父が、馬鹿に、可愛がつてるから、心配して、行／＼のを喜ばない。まだ僕を小供だと思つてる。夜

おそく、帰つ／た晩だ。交番の角へ来て、待つてるぢや、ないか。それが十二時ちか／くだ。寝巻の上へ、オバアコオトをつけて、白い臂を風に吹か／せ乍ら、寒さうに立つてるぢや、ないか。僕は泣いたよ。別に芸(以上6枚目)

妓(一字抹消)買をして来た訳ぢやなし、谷崎の家で話し込んでちやつたん／だ。僕は幸福だねえ。

ああ又長くなつた。止めやう。

二十九日夜ふけて、

陽生

雪様

(解説)

この手紙は、大貫と藤井敏子の恋愛事件に関連するものである。敏子は、第二次「新思潮」明治四十三年十二月号に掲載された大貫の小説「嘆き」のほか、谷崎の「癡」「亡友」、岡本かの子の「ある時代の青年作家」などにも登場する。

敏子が、結婚式を挙げる当日、一高の授業の最中に、手紙を小使に託して大貫に渡し、小石川の植物園に呼び出して、かの子と三人で会ったことは、「嘆き」に出ているが、会いに行く前に大貫が恒川と相談したことは、この手紙によって初めて分

かる。

「嘆き」では、この後間もなく、六月初旬に、大貫のもとを谷崎(作中では石井)が、十七日の月見がてら訪ねたことになっている。「嘆き」には、(その夜彼はこの親しい友達から、友達が嘗て純粹な心である女を恋して居たが、その前途が覚束ないのを知つた時どの位落胆したかといふことを聞いた。さうして友達が烈しい憤と嘆きを抱いてどんなに暗い、しかし紅く彩られてある街々を逍遙ひ始めたかを察する事が出来る様に思つた。)とある。この(ある女)は勿論、穂積フクである。

友人・曾野の姉については、「嘆き」の中でも、この年の五月初旬に敏子と再会した際、(男の胸の中には三年間の女の不在中に何時しかある下町の、髪を兼帯に結つた、姉さんらしい顔が棲つて居た) (人形町に住んで居る友達姉の白い顔はその時も男の胸にあつた)などと描かれている。また、谷崎の「亡友」にも、杉田という仮名で登場している。明治四十二年二月二十四日付けで茨城県助川町の倍楽園別荘から大貫雪之助に宛てた谷崎の絵葉書に(Sの事については君に同情する。けれど僕は今軽々しく手を出して余計な世話をすべき性質な事件でないと思ふから見物する。)とあるのも、或いは曾野の姉のことかも知れない。

曾野は明治四十五年五月末に夭折したらしく、同年七月十五日付けの谷崎の大貫宛書簡に、〈曾野律氏の訃報はすでに御存知の筈今度四十九日に土屋飯沼氏諸氏打連れて仏參に出かける趨君にも御出京如何にや〉とある。

恒川自身の恋人については、何も分かっていないが、前出の「鎌倉日記」に〈大好きな人〉として〈お十夜ちゃん〉が出て来て、しかもそれが〈お貞ちゃん〉と同窓らしい書き方がされているので、跡見女学校の生徒で、「十夜」という名だったと推定される。四高時代の体験に取材したらしい恒川の小説で、「明星」明治四十年七月号に載った「女役者」にも、〈市ヶ谷のお十夜ちゃん〉が、恒川の恋人として出て来る。自殺については、早く「明星」明治四十年十、十二月号に載った「浜町河岸」に、フィクションではあるが、主人公が幼馴染みの芸者との結婚を親に反対されて、自殺を考え、姉に止められる話が出て来る。

恒川は、この手紙の中で、自分は〈谷崎の云ふ思想ほど迄に墮落はして居ないつもりだ。〉と書いているが、この事から逆に、潤一郎のデカダンスは、この頃既に思想信条の域にまで達していたであろう事が推量できる。谷崎が荷風の「あめりか物語」を読み、自分の芸術上の血族が現れたと感じたのも同じ年

であるし、「亡友」で〈私は、その頃だん／＼Blasphemousな文学の宗派に親しみ出して、糜爛した官能の快楽より外に、芸術の境地はないもの、やうに思つて居た〉と言うのも、この頃のことを指すのであろう。なお、恒川は後に、唯一の著書「旧道」（大正三年十一月刊）の中で、恐らくは谷崎を念頭に置いて、〈ぐうたらとデカダンスとを混同してゐる奴や、法医学の一番もよんで女の足の裏をなめるのを深刻がつて一時の評判をとるやうな下等な奴に何が出来るもんか。（中略）もしも眞摯に人生を考へて来ればどうしても人格そのものが眞剣であり眞面目でなければ生きてゐられなくなる筈だ。この意味で僕は今の作家で白樺のS、Mと云ふ人が好きだ。〉と書いている。

岡本かの子は「ある時代の青年作家」の中で、恒川を評して、〈善良な浅い性格の青年で家では相当に我まゝなお坊ちゃんだらう〉（ネガチーフな特長さへない）〈普通の才子型であり上品な良家のお坊ちゃん型〉と言っているが、この手紙や「旧道」を読むと、それが正鵠を得たものだった事が良く分かる。

⑦明治42年7月13日付け葉書

「用筆・用紙など」青インク

〔表〕

神奈川県橘樹郡高津村

大貫雪之助様

静岡三ノ四

やう生

切手 一銭五厘

消印 静岡 42・7・13 前11―后

消印 武蔵 溝ノ口 四十二年七月 十四日 イ便

〔裏〕

浮かれて此處ところへ参り候、これ

から今日は興津へゆく、ゆうべ、生れて

始めて、浪花節といふ奴をきき申候

安倍川の河原の石のつぶ石の

あなつぶつぶと拾ふ子もなし

十三日

〔解説〕

一高を卒業して、東京帝国大学へ入学する直前の、旅先からの葉書である。

◎明治43年7月30日付け絵葉書

〔用筆・用紙など〕黒インク

〔表上段〕

神奈川県橘樹郡高津村双子

大貫雪之助様

青山北町七丁目二

恒川生

三十日

切手 一銭五厘

消印 青山 43・7・30 后1―?

消印 神奈川溝ノ口 ?・7・31 ? 8―11

〔表下段〕

御端書拝見、何の御愛

相もなく小生こそ失礼

申上候。

兄よ、我等の「時代」は必ず

展開いたす可く候。又致さ

せねば承知仕らじと決心ま

かり在り候。只「時間」の間

題のみ。湧き出づる涙を
呑んで暫らく静養すべ
きか。

我等の一生は努力の一生
也。死して止むべく候。僕は、
今も、限りなき希望と極まり
なき苦痛とに繋れて泣いて
ゐるのです。

「裏」
ね、

どうせ、生れたんだ。

素的な、「人間」らしい
生活を味つて見やう
ぢやないか。

無意味に且墮落して
生きてるより死んで畢
つた方が、気が利いて
らア…………。

陽生

雪兄

(解説)

第二次「新思潮」創刊直前の絵葉書。恒川は、四十四年三月
号に一度だけ小説「鑑定」を掲載している。一方、大貫は、品
川の名で毎号のように小説や翻訳を発表しているほか、夕葵之
助の名で四十三年十月号にモーパッサンの「川魚」、四十四年
一月号にツルゲーネフの「思想の終焉」、柚樹生の名で四十三
年十月号に「小説月評」を載せている。「夕葵」も「柚樹」も
大貫の本名・雪之助の「ゆき」を「ゆうき」と引き伸ばして漢
字を宛てたものであろう。

◎明治43年8月7日付け絵葉書

〔用筆・用紙など〕毛筆

〔表〕

神奈川県橋樹郡高津村

大貫雪之助様

塔の沢環翠楼にて

恒川生

切手 一銭五厘

消印 ? 43・8・7 后2―?

消印 神奈川溝ノ口 43・8・8 后2―5

〔裏〕(注「箱根風景 塔の沢朝霧」の上に)

此部屋には「縹渺の

飛閣」といふ額が掛つてゐる

〔解説〕

この翌日からの大雨で、九日朝から関東地方各地で洪水などの被害が出ていたが、箱根では十日午後六時半、山津波が発生し、避暑に来ていた劇道家・川尻宝翠らが命を落とした。この時、湯本の福住別館に逃げた萬龍が氣を失い、居合せた恒川が葡萄酒と宝丹を飲ませて介抱した事から、二人の恋愛が始まったようである。その経緯については、明治四十三年八月十八日の「都新聞」(三三)面記事のほか、小山内薫の「梅龍の話」や恒川自身の「旧道」にも出てゐる。

なお、単なる偶然ではあるが、同じ時に、岡本一平が洪水の多摩川を渡って大貫家にかの子との結婚を申し込みに訪れ、遂に承諾を得るといふ出来事もあつた。

⑩明治44年9月7日付け葉書

〔用筆・用紙など〕黒インク

〔表〕

神奈川県橋樹郡高津村、双子

大貫雪之助様

切手 一銭五厘

消印 ? 44・9・7 后2―3

消印 神奈川溝ノ口 44・9・8 前8―?

〔裏〕

その後は私こそ御無沙汰、申訳ありません、そして御病氣といふことも存せず、失礼いたしました。いづれ忌明の上、久々にて御たづねいたしたいと存じて居ります、御丁寧に御吊詞戴き恐入りました。

青山にて

恒川生

〔解説〕

「旧道」によれば、恒川の姉は、結婚後、(明治四十四年の初秋に亡くなつた。)ここで言う「忌明」は、その姉の忌明を指す。

一方、《御病氣》とあるのは、『岡本かの子全集』年譜や『品川日記抄』（朱樂^{シヨウ} 大正元年十二月号）の木村莊太による後記によれば、この夏、大貫は激しい大腸カタルと強度の神経衰弱に罹ったからである。なお、大貫は、この病から完全に回復し切る前に丹毒になり、大正元年十一月二日午前六時、急死した。享年は二十六歳だった。

「日本近代文学館」百二十号に紹介された大正元年十一月十四日付け杉田直樹宛の谷崎の葉書には、《故文学士大貫雪之助氏去ル貳日逝去致されしに付来十六日午後一時駒込西教寺に於て追悼会相営み可申万障御繰り合せ御出席願上候 幹事 谷崎潤一郎》とあるが、十一月九日の「よみうり抄」では、谷崎と恒川が追悼会の発起人とされている。

最後に、恒川陽一郎の略歴を記しておく。

明治二十一年一月二十六日、横浜船渠会社員工学博士恒川柳作・花子夫妻の長男として青山北町七の二に誕生。代議士・風間礼助と結婚した姉のほか、弟・呉作、妹・ひで子がある。赤坂春本の萬龍こと姪間静子（明治二十七年七月生まれ）と恋愛し、大正二年三月、落籍のための資金作りに谷崎も協力した。この事は、恒川自身が新聞記者に語って、大正二年三月二十七日の「東京朝日新聞」に「萬龍と恋の犠牲」という記事が出た。

その後、東京帝国大学仏法科卒。大正五年八月九日午後三時十五分永眠。享年二十九歳。『青春物語』によれば、死因は慢性中耳炎で、谷崎は通夜に出席して、来合わせていた生田葵山らと話をしたという。葬儀は十四日午前九時、小石川区小日向水道町本法寺で執り行なわれ、この時、友人總代として参列した建築家・岡田信一郎が、後に恒川未亡人と再婚した。

なお、全体に、恒川の文章には説点が多いという印象があるが、これは、彼が胸の病に侵されていて、息が続かなかつたためであろう。

【付録・写真解説】

恒川陽一郎の写っている写真は極めて珍しく、わずかに府立一中時代に谷崎潤一郎・大貫雪之助らと一緒に撮ったものと、一中卒業記念の集合写真とが、今日一般に知られている程度である。ここに紹介するのは、大阪市立大学附属図書館所蔵の大島堅造の著書『一銀行家の回想』（昭和38年 日本経済新聞社刊）のグラビアから複写したもので、左から清水時好・恒川陽一郎・谷崎潤一郎・大島堅造である。

大島堅造は、明治二十年生まれ。東京府立第一中学校三年の二学期に、二年から三年に編入されて来た谷崎と同級になり、

交友が生じた。明治三十六年九月には、「学友会雜誌」第四十号に『無題録』を分担執筆したりもしている。明治三十八年、一中を卒業後、一ツ橋の高等商業を経て、明治四十二年、住友銀行に入り、常務・専務を経て本社監事となり、甲南大学教授や阪急電鉄取締役なども歴任した。

この写真に付した大島堅造の覚書には、

〔明治四十二年七月六日卒業就職祝賀ノ宴ヲ神田川ニ開キ紀念ノタメ之ヲ撮影ス〕

谷崎君ハ文科大学恒川君ハ法科大学、清水君ハ日本銀行ニ入り余ハ旬日ナラスシテ大阪住友銀行ニ出発セントスル際也。余ハ谷崎君ヨリ御影ノ客窓ニ立テ之レヲ手ニシ相見テ夜ヲ過ゴセリ。世ニ貴キモノハ富ニアラズ榮誉ニアラズ。交誼ナリ、愛情ナリ、肝膽ユルセル竹馬ノ友也。

七月十五日夜十時之レヲ記ス。とある。この覚書は、谷崎が阪神間に居住し、大島堅造が御影町西平野に住んでいた時期に書かれたものと推測できる。

『一銀行家の回想』によれば、谷崎は、大阪へ旅立つ大島を新橋駅まで見送り、恒川は一足先に静岡へ行って、駅で大島を待っていてくれたと言う。明治四十二年七月十三日付けで静岡から出した恒川の大貫宛葉書は、この時のものである。同書に

はまた、〔恒川君は仏法科学生であつた。恒川君の父君は明治初年のフランス留学生で、バリの大学で土木工学を専攻し、私たちが知つた当時は海軍省の勅任技師で、横須賀、呉、佐世保の諸軍港はその設計になると聞いていた。谷崎君も私も子供のころは恒川家にはずいふんと世話になつた。恒川君と私との交友は、明治三十三年三月東京府立一中入試の日、試験場の席が隣同志であつたので結ばれ、それ以来、同君が短かい生涯を終

わるまでずっと続いていた。)という貴重な証言がある。

また、大島の別の著書「春風秋雨八十年」(昭和42年 ゲイヤモンド社刊)には、グラビアに、明治三十八年一月十四日に大島・恒川・谷崎の三人が、制服制帽で撮影した記念写真があるほか、恒川の家は、最初、牛込佐内坂上の高級住宅地にあつて、広い御屋敷だったという証言がある。「春風秋雨八十年」にはまた、谷崎の『春風秋雨録』は、「学友会雑誌」の編集にあつていた土岐善麿から、谷崎と大島の連名で一文を草するようになつたという注文があり、谷崎の発案で題を決め、「秋雨」の方を谷崎が、「春風」の方を大島が書く事にしたという記述があり、興味深い。また、東京近郊の或る寺の和尚が、谷崎に時折お経の本を貸し与えていて、或る日、谷崎は一中の運動場で、休み時間に「法華経」第二十五「観世音菩薩普門品」を大島に見せ、中で一番の明文はどれかという大島の問に対して、たちどころに「悲体戒雷震／慈悲妙大雲／澍甘露法雨／滅除煩惱焰」という一節を指差したと言ふ話も出ている。この和尚は、野村尚吾の「伝記 谷崎潤一郎」に言う目黒の寺に居た稲葉清吉先生の兄にあたる和尚であらう。

大島のもう一つの著書「回想の八十年」(昭和45年 日本経済新聞社刊)には、潤一郎が一中五年の時、試験中に隣席の生

徒に頼まれて英語の答案を吸取紙に書いて渡した所、監督の先生に見つかり、教わつた方は落第、潤一郎は英語の成績を0点にされたというエピソードが出ている。谷崎の府立一中時代の成績表を見ると、外国語の二の点数が、一学期は85点、二学期は90点なのに、最後の学年試験だけ48点と異常に低くなっている。或いは0点ではなく、大幅に減点されただけかも知れないが、いずれにしても、谷崎の一中卒業成績が、全校八番に下がっているのは、この事件のせいらしい。

なお、「回想の八十年」には、上記の他にも、潤一郎は(家が貧乏なうえ、生活がだらしないので、多くの友人から金を借りたが返さない。私(大島)も被害者の一人であつた)という話や、東京帝国大学で潤一郎が根本通明の易経の講義を聞いていた事、明治四十五年(恐らく六月)、所謂京阪流連時代の潤一郎が、大島の下宿していた大阪市内常安橋南詰の旅館大津屋の別室に、一週間ほど滞在した事などが出ていて興味深い。